腎虚に対するコラボレーション（その1）

中醫堂　関口 善太

前号より，漢方薬と鍼灸治療のコラボレーションをテーマとして，「鍼薬同効」の応用について連載させていただいている。前回の総論的な話に続いて，今号より具体的な内容の説明に進むが，最初のコラボレーションとして腎虚に対するものを取り上げ，3回に分けて紹介していく予定である。その初回である今号では，腎虚に用いられる中薬と経穴を列挙した後，日本で使用されている代表的な漢方製剤を分類して，その組成からコラボレーションの必要性について考察してみる。

補腎に用いる漢方薬と鍼灸治療のコラボレーション

1．補腎に用いられるおもな中薬

補腎に用いるおもな中薬を，後述する補腎の方剤の組成を参考に表示したのが**表1**である。これには，補陰薬と補陽薬に分類されるものを中心に，補血薬・補気薬・固渋薬および清熱薬・利水薬などに分類されるものが含まれる（ただし，日本で入手できないものは割愛した）。

このなかでの注意点は，寒熱性である。中薬

表1　補腎に用いるおもな中薬

補益薬	補陽薬	温熱性が軽度な中薬：鹿茸・鹿角膠・冬虫夏草・肉蓯蓉・淫羊藿・巴戟天・杜仲・続断・骨砕補・兎絲子・狗脊・胡桃肉・蛤蚧 温熱性が強い中薬：補骨脂・益智仁・仙茅
	補気薬	人参・山薬・黄耆
	補血薬	熟地黄・何首烏・阿膠
	補陰薬	涼寒性が軽度な中薬：枸杞子・亀板・亀板膠・沙参・麦門冬・石斛・鼈甲 涼寒性が比較的強い中薬：天門冬・旱蓮草・女貞子
固渋薬		山茱萸・五味子・肉豆蔻
温裏薬		肉桂・炮附子
清熱涼血薬		生地黄（乾地黄）・玄参・牡丹皮
清熱瀉火薬		知母・黄柏
利水滲湿薬		茯苓・沢瀉・車前子

漢方薬と鍼灸治療のコラボ／第２回.indd　1　2016/11/29　12:00:20

の性味では五性と称して，熱性の強いものから順に「熱→温→平→涼→寒」の５段階に分けている。補陽薬の五性は，平から熱であり，補陰薬の五性は平から寒である。腎は陰陽互根のため，補陽剤の組成にも補陰薬が含まれ，補陰剤の組成にも補陽薬が含まれるが，熱性が強いものは陰液を焼灼し，寒性の強いものは陽気を損ねるため，熱性の強いものを補陰剤に配合する場合や寒性の強いものを補陽剤に配合する場合は注意が必要となる。そこで**表1**中の補陽薬と補陰薬は，それぞれ温熱性の強いものと涼寒性の強いものを分けて表示してある。

次に紹介する経穴をみると，温熱性の強い中薬と類似した効能を発揮させる際には，焼山火法や灸補（補法した後に灸頭鍼を施す）を施し，寒涼性の強い中薬と類似した効能を発揮させる際には，透天涼法を施すことで対応していることがわかる（**表2**）。

２．補腎に用いる経穴

李式伝統鍼灸において，補腎の鍼灸処方を構成するおもな経穴は「太渓・復溜・気海・関元・腎兪・命門」と非常に少なく，これらの組み合わせおよび手技の違いによって漢方方剤と同じ効能を打ち出しているため，まずこれらの経穴について**表2**に示した。なお，腎虚から派生した脾腎陽虚・心腎不交……などの臓腑兼病病証では，さらに合谷・神門・神闕……などの経穴も配穴されるが，これらについては次回以降の具体的な鍼灸処方のなかで紹介する。

腎に対する経穴効能比較

- **命門と腎兪**：両穴の灸補はともに温補腎陽に作用するが，命門は腎兪より温陽に優れると考えられる。そのため，命門に類似する中薬のなかに温裏薬の炮附子や肉桂を含めている。その反面，腎兪は単純に補法を施すと腎精も補益できるが，命門にはその効能はない。
- **関元と気海**：両穴の補灸や補＋焼山火はともに温補腎陽することができるが，関元のほうがより温陽に優れ，気海は腎気の補益に優れる。そのため，気海が類似する中薬のなかには，補気薬の人参・黄耆が含まれている。
- **太渓・復溜・腎兪**：『臨床経穴学』では，単純

表２　補腎で用いるおもな経穴

	手技	効能	類似中薬
太渓	補	補益腎気	兎絲子・杜仲・人参
		滋補腎陰・益髄健脳	熟地黄・何首烏・枸杞子・女貞子・石斛・山茱萸
	灸補・焼山火	温補腎陽	冬虫夏草・鹿茸・肉蓯蓉・仙茅・補骨脂・枸杞子
復溜	補	滋補腎陰・益髄健脳	熟地黄・枸杞子・山茱萸・何首烏・石斛・生地黄・女貞子・旱蓮草
	補＋透天涼	滋陰降火	生地黄・玄参・知母・黄柏
腎兪	補	補益腎精・強壮腰脊	熟地黄・枸杞子・続断・杜仲・兎絲子・山茱萸
	灸補・焼山火	温補腎陽	冬虫夏草・鹿茸・肉蓯蓉・狗脊・仙茅・補骨脂
命門	補（加灸）	補腎培元・壮腰補虚	炮附子・肉桂・狗脊・続断・杜仲・淫羊藿・鹿角・巴戟天・補骨脂・益智仁
関元	補・灸・焼山火	温補脾腎 真陽の温補	冬虫夏草・鹿茸・淫羊藿・仙茅・補骨脂・巴戟天・肉桂
気海	補・灸・焼山火	温陽益気	人参・黄耆・五味子・補骨脂・胡桃仁

漢方薬と鍼灸治療のコラボ／第２回.indd 2　2016/11/29 12:00:36

に太渓は腎気と腎陰をどちらも補うことができ，腎兪は腎気を補い，復溜は腎陰を補うことができるとしている。しかし類似の中薬を見る限りでは，人参を含めている太渓のほうが腎兪より補気の作用は優れており，腎兪は腰脊の強壮に優れると考えられる。また，太渓と復溜では，生地黄・女貞子・旱蓮草といった寒性の中薬と類似の復溜のほうが，虚火を伴った腎陰虚に対してはより効果的である。

【参考】

三陰交は足の三陰経の交会穴であるが，李式ではその効能を生血・養血・統血作用を中心に考えており，腎陰の滋補はあまり強調していない。そのため，類似する中薬も阿膠・何首烏・竜眼肉などの補血薬が中心であり，さらに補血剤の四物湯にも類似しているとしている。清脳開竅法の三陰交は補肝腎としているが，これは刺鍼方向を斜め45度にして，鍼先が腎経（復溜の1寸上付近）に達していることに由来すると理解できる。

3．補腎に用いられる代表的な漢方方剤とその組成

日本で使用できる漢方製剤には，病院が処方箋で出すことのできるエキス製剤以外に，薬店や薬局のみで購入できる市販（一般用）のものがあるため，鍼灸とコラボレーションさせる場合には，それぞれの製剤を把握しておく必要がある。そこで，漢方方剤を医療用と一般用のどちらにもあるもの・一般用にしかないもの・方剤学に収載され中国では繁用されているが日本では製剤化されていないもの，という3群に分けて**表3・表4・表5**に表示した。

なお，都気丸は日本では製剤化されていない

表3　日本で製剤化され，医療用と一般用のどちらにもあるもの

対象病証	方剤	組成
腎陰虚	六味地黄丸	（熟）地黄・山薬・山茱萸＝「三補」，牡丹皮・沢瀉・茯苓＝「三瀉」
腎陽虚の主水関係	八味地黄丸	六味地黄丸（ただし生地黄）＋肉桂・炮附子
	牛車腎気丸	八味地黄丸＋牛膝・車前子
	真武湯	炮附子・茯苓・白朮・芍薬・生姜

表4　日本で製剤化されているが，一般用にしかないもの

対象病証	方剤	組成
肝腎陰虚	杞菊地黄丸	六味地黄丸＋菊花・枸杞子
肺腎陰虚	麦味地黄丸	六味地黄丸＋麦門冬・五味子　（都気丸＝六味地黄丸＋五味子）
陰虚火旺	知柏地黄丸	六味地黄丸＋知母・黄柏
心腎不交	天王補心丹	地黄・人参・丹参・玄参・茯苓・五味子・遠志・桔梗・当帰・天門冬・麦門冬・柏子仁・酸棗仁
陰陽両虚	亀鹿二仙膠	亀板膠・鹿角膠・人参・枸杞子
腎陽虚の生殖関係	海馬補腎丸	人参・茯苓・黄耆・桃仁・丁字・地黄・山茱萸・竜骨・枸杞子・大海馬・鹿茸・驢腎・鹿筋・補骨脂・蛤蚧尾・海狗腎・鹿腎・鮮対蝦・当帰
肝腎両虚，腰膝酸痛	養血壮筋健歩丸	当帰・芍薬・枸杞子・地黄・山薬・亀板・五味子・人参・黄耆・白朮・杜仲・補骨脂・兎絲子・炮附子・牛膝・蒼朮・黄柏・防已・防風・羌活

漢方薬と鍼灸治療のコラボ／第2回.indd　3　2016/11/29　12:00:36

表５　方剤学に収載され，中国では繁用されているが日本では製剤化されていないもの

対象病証	方剤	組成
腎陰虚 精血不足	左帰丸	「三補」・枸杞子・兎絲子・鹿角膠・亀板膠・川牛膝
	左帰飲	「三補」・枸杞子・茯苓・炙甘草
肝腎陰虚 血燥気鬱	一貫煎	生地黄・北沙参・麦門冬・枸杞子・当帰・川楝子
陰虚火旺	大補陰丸	熟地黄・亀板・知母・黄柏・猪脊髄
腎陽虚 精血不足	右帰丸	「三補」・枸杞子・鹿角膠・兎絲子・杜仲・当帰・肉桂・炮附子
	右帰飲	「三補」・枸杞子・炙甘草・杜仲・肉桂・炮附子
脾腎陽虚 五更泄瀉	四神丸	補骨脂・五味子・呉茱萸・肉豆蔻

が，次回紹介する李世珍の鍼灸処方には「都気方」という都気丸に類似するものがある。都気丸は麦味地黄丸から麦門冬を除いたものであり，日本ではそれで代用できるため，**表4**のところに追記した。この他，同じ**表4**の腰膝酸痛に応用できるものとして，分類上は祛風湿剤のため記載はしていないが，独活寄生湯の製剤も最近市販されたので，商品知識として覚えておくとよい。

１）補腎に用いられる漢方方剤の中薬構成による分類

腎は陰陽互根であるため，腎陰虚・腎陽虚は他の臓腑の陰虚や陽虚とは異なり，それぞれ陽中求陰・陰中求陽という特徴的な治療を必要とする。そして，その代表的な方剤が六味地黄丸と八味地黄丸，および左帰丸（左帰飲）と右帰丸（右帰飲）である。そこで，これらの方剤における中薬構成について以下に紹介する。

腎気は腎精より生じるため，腎の陰精を補う中薬は腎陰虚・腎陽虚ともに欠かせない。そして，その主要な中薬が熟地黄である。熟地黄は**表1**の分類では補血薬に属するが，精血を滋補するため補腎の代表的な中薬と位置付けられており，これを補助する山薬･山茱萸とともに「三補」と呼ばれる。ただし，日本では熟地黄は日本薬局方に収載されていないため，六味地黄丸などのエキス剤ではどれも乾地黄が使用されており，滋腎の作用は本来のものに及ばない。

次に，腎には水液を気化して排泄・蒸騰させる主水機能があり，この機能が衰退していると，粘膩性の地黄・山薬によって水湿の壅滞が起こりやすくなる。沢瀉・茯苓はこれを防止する目的で配合された利湿薬であり，虚熱を防止する目的で配合された牡丹皮と合わせて「三瀉」と呼ばれる。

一方，腎には蔵精をもとに，骨髄・脳（髄海）の生成や発育・生殖を主る作用があるが，この作用を補強するには，陰液を乾燥させてしまうおそれのある利湿薬を減らし，三補以外にさらに塡精益髄に働く中薬を加えることが必要となる。

以上のことをもとに補腎の漢方方剤を分類すると，処方構成を「三補三瀉」をベースにしたグループと，三瀉を捨てて塡精益髄の中薬を配合したグループに分けることができる。そして，「三補三瀉」を用いたグループの代表が六味地黄丸と八味地黄丸であり，三瀉を捨ててより塡精益髄を強化したグループの代表が左帰丸と右帰丸ということになる。

２）日本の漢方製剤の不足部分と鍼薬のコラボレーション

上記の補腎剤の２大分類のうち，臨床に使いたいが日本には製剤がなくて困るというのが，三補に塡精益髄作用のある中薬を加えた左帰丸と右帰丸である。腎虚でも泌尿器関連の症状が

漢方薬と鍼灸治療のコラボ／第２回.indd 4　2016/11/29 12:00:36

主訴である場合は六味地黄丸や八味地黄丸がよいが，生殖器関連や中枢関連および腰膝の衰えを中心とした運動器障害などを主訴とする場合は，塡精益髄に優れていないと効果が劣るからである。市販のものが使える場合は，亀鹿二仙膠を六味地黄丸と合方して用いると，三瀉は依然として残っているものの，それ以外は左帰丸に近い中薬構成となることで，そうした病態にもある程度の効果が期待できる。しかし，亀鹿二仙膠は医療用漢方製剤には含まれておらず，病院からの処方箋では服用することができない。こうしたことから，鍼灸外来を併設している病院などで鍼薬を併用する際には，ここに大きな意義を見出すことができる。

以上の点を踏まえて，李世珍の鍼灸処方と漢方製剤を使った実践的なコラボレーションについて，次回より腎陰虚に対応するものと，腎陽虚に対応するものに分けて順次紹介していく予定である。

（つづく）

漢方薬と鍼灸治療のコラボ／第２回.indd　5　2016/11/29　12:00:36